

花代の正体

花代の世界はくるくるとその表情を変える。柔らかく、そしてハイパーモダンな世界だ。ドイツを拠点にした日本人アーティスト花代は、今に至るまでずっと、パフォーマーとして生きてきた。まず彼女は芸者としてスタートし、後にロンドンの『フェイス』誌の表紙を飾ったり、ジャンポール・ゴルチエのキャンペーンモデルに起用されたことで脚光を浴びる。花代が日本のスーパースターになったのは、ヨーロッパでの成功があったからではない。日本のテレビのコメディショーで彼女は人気者になったのだ。メディアに引っ張りだこのタレントであると同時に、花代はニューヨーク、ヨーロッパ全土、そしてアジアで、レッド・クレヨラなどいくつものバンドと活動している。彼女の音楽をフィーチャーしたCDも数多くプロデュースしている。最新作は大ヒットし、そのうちの一曲はパリのコレット・ミックス・CDに最近、収録された。一旦ステージに現れるや、花代は単なる歌手ではなく、パフォーマーとしてひとりのキャラクターになる。パフォーマンス・アーティストとステージ上の歌手というふたつの顔の狭間にいる花代は日本のビョークといってもいいだろう。彼女は、子供時代の甘く優しい生活と、その正反対のワイルドなまでの暗い経験との狭間にいる。純粋さと不純さの間にいる美女であり、野獣なのである。花代はあらゆるカテゴリーを拒絶する真のアーティストだ。これは逆説的であろうか？ いや、まったく違う。髪やコスチュームをロリータ風に遊びながら、同時にまったく逆の極限までレバーを引いて、彼女はパンク・ワードやロックっぽい荒くれた態度でも遊ぶのだ。今時のアジアの少女たちが好きなように着飾り、好きなように振る舞っているあのゴージャスなやりたい放題を楽しむ彼女は、マンガのキャラクターのようだ。文化的には、エレクトロ・ミュージックで今見られるような数々のミキシング、そして海賊版レコードの現象といった感じだ（それは同居するはずのないふたつのものがオーバーラップする海賊版）。

彼女はいつでもあらゆる状況をひっくり返す。彼女はあなたが期待するような答えなんてくれないで、また違う状況を作り上げてしまう。何らかの定義を与えられている現実の場所に彼女をあてはめようなんて思わない方がいい。だからと言って彼女は決してトラブルメーカーというわけではない。

アンダーグラウンドのエレクトロニック・ミュージシャンやDJたちとCDを発表するかたわら、彼女は写真集や、彼女の名前の由来となった漫画を出版したり、多くの美術館や劇場でパフォーマンスを上演するなど、広範囲にわたって自分の作品展を行ってきた。花代はどこにでもいる。彼女の作品はまさに「花ワールド」だ。すべてがその世界の一部であり、すべてがあまさずそこにある。彼女がいつも写真を撮っているのはこのためだ。彼女の撮るスナップ写真は彼女の日常生活の写真日記なのだ。そこには彼女を取り巻く環境がある。友人、娘、暮らす町々、旅行……つまり、彼女の生活が。自分のまわりで起こることすべてを写真に収めるのだ。こうやって彼女はギャラリーの真っ白い四角い部屋を「花ルーム」にしてしまう。

新世紀に入り、アートの理解というものはまったく新しい次元に足を踏み入れている。1980年代はパブリック・イメージ、ブランド・イメージ、そしてロゴの時代だった。正反対に、ここ数年、アートは私的で個人的なものへと向かっている。日記や伝記、自伝や日常会話のスタイルをとった写真やビデオ、インスタレーション作品が数多く発表されている。

花代の写真は露出をかけすぎていたり、ぼやけていたり、またとてもカラフルだ。その写真の質は従来のプロカメラマンのあらゆる技術を否定し、もっとカジュアルで素人っぽいセクシーさを狙った新しい「技術」を進化させている。つまり実験的な作品なのだ。彼女の写真を前にすれば、時間の流れなんて消えてなくなる。時間的な遠い近いといったことは有効性を失い、違う時間に違う場所で起こったできごとが同居してしまう。生活の中で起こったできごとがごちゃまぜに思い出へと浄化されていったり、めちゃくちゃな語りで事実の流れを逆流させてしまったり、どちらかというところ、始まりも真ん中も終わりもない、ジャン＝リュック・ゴダールの手法に近い。断片的なぼらぼらの語りだ。断片の数だけ始まりがある。これらの断片はどこにも発展していかないし、まして説明もされない。すべて宙ぶらりんのまま、まるで私たちの世界観を聞き出すために放られた釣り糸のように、たくさんの質問だけが問いかけられる。この謎解きの可能性は、ひとりひとりの個人とその理解の違いにある。謎解きは作品の理解の隠喩でもある。断片としての作品の。

これらのスナップ写真は、まるで泡がはじけ飛ぶ夢の世界だ。テクノやマンガの文化をとりこみながら、彼女は家族との親密な関係から脈々と続く伝統的なものまで見せる。終わりのない世界を発展させているのだ。彼女の音楽のスタイルといい、毎日変わるドレスコードといい、写真といい、彼女はひとつの定義の中に閉じ込められないようにしているカメレオンのようだ。どのパフォーマンスを見ても、あなたは彼女があなたに感じて欲しいと思うことを感じてしまうことだろう。逃げ道はないのだ。

なりたたないインタビュー

ジェローム・サンス（以下J） あなたは写真家、アーティスト、ミュージシャンとして知られていますが、芸者やゴルチエのモデルとしても知られています。つまり、日本的なアイコン、メディアのスターです。伝統と現代性との間のどこであなたはバランスをとっているんですか？

花代（以下H） 私はタイムトラベラーなんです。

J あなたの写真作品は個人的な日記、つまり毎日の記録という感じなんです。が、あなたにとって写真とはどういうものですか？ ご自分の写真作品についてどのように考えていますか？

H わさびを食べたときの、鼻と目の間みみたいな感じです。

J 子供の世界、身体の写真、そしてメーキャップによる視覚効果、というものがあなたの作品には見られます。花代ワールドはいくつもの顔を持っているんですか？

H いいえ。

J あなたはよく日本のビョークと言われますが、どう思いますか？ 彼女と同じ女性像を体現していると思いますか？

H ビョークって誰？

J 歌手、そしてミュージシャンとしての仕事はあなたの仕事の中でも特に大切なものですね。ステージに上がると自分自身に戻るのですか？

H 私にとって一番大切なのはお母さんでいること。

J コンサートで歌っている時、観客と、そしてバンドと一緒に演奏していますね。コンサートはあなたがすべてを与え、愛までも与える親密な場所のように感じるのですが、これがあなたが自分自身を与える方法なんですか？

H 芸者をやっていた時に覚えたことです。

J あなたのスタイルであるエレクトロ・ポップは、もうほとんど定義不可能なもので、あなたも時々、あなたの人柄や見た目と **180度**違うワイルドでパイオレントな感じになってしまうんですが、これは問題に煙幕をかけるひとつの方法ですか？

H かもしれません。

J あなたの歌では、たくさんのスタンダードソングやポップスのリミックスをしていますね。どうしてですか？ そして、あなたはどんな音楽が好きなんですか？

H フランスの歌を **2曲**やったばかりですよ。

J 生活の拠点としてベルリンを選んだのはなぜですか？

H 選んだことは一度もありません。

J これからの計画は？

H 美しい男の赤ちゃんを産んで、お城に引っ越すこと。

H a n a y o

花代 **1970**年生まれ。幼少から音楽、写真、踊りなどに親しみ、**1995**年ドイツに移住。ベルリン在住。日本で芸妓をしていたという経歴と、ヴィジュアルアーティストと音楽の関係が伝統的にとりわけ深いベルリンでのアンダーグラウンド・アーティストとしての活動が見事にミックスし、未来的なマンガから生まれたパンク・ロリータの世界をより進化させている。音楽、パフォーマンス、そして日常の生活を写した写真など、彼女の日記はまさに万華鏡のように自由奔放に構成されている。**2002**年**7**月にパレ・ド・トーキョー（パリ）で個展を開催。

U n t i t l e d , 2 0 0 2

U n t i t l e d , 2 0 0 2

Both images courtesy of GALLERY KOYANAGI

All images: Untitled, 2002 Courtesy
of GALLERY KOYANAGI